

内山完造研究会報告①

内山完造の足跡を辿る ― 岡山・大阪・京都 ―

川崎 真美（東京大学学術支援職員）

2018年4月より本格始動した内山完造研究会は、6月27～29日にかけて内山完造の足跡を辿るべく、岡山・大阪・京都の調査出張をおこなった。参加者は研究会メンバーである内山籬、大里浩秋、孫安石、菊池敏夫、柳澤和也、中村みどり（以上、敬称略）、筆者の7名である。

内山完造は1885（明治18）年に岡山県後月郡芳井村（現・井原市）に生まれた。魯迅と知己の間柄であったことや、戦後は日中友好協会理事長をつとめるなど、日中文化交流史に大きく貢献したことで知られる。今回は内山完造による自伝『花甲録』の記述をもとに、完造が参天堂（現・参天製薬）の社員として28歳で上海に赴く前の日本国内での足跡を辿った（以下、特に断りのない限り頁番号は内山完造『花甲録』岩波書店、1960年のものとする）。

内山完造の故郷

6月27日午前に東京・横浜をそれぞれ出発し、昼前に福山駅に到着した。福山市日中友好協会会長の佐藤明久氏の出迎えを受け、昼食をとったのち、内山完造の生誕地である岡山県井原市に向かった。井原市ではまず高野山真言宗の吉井山成福寺を訪れた。内山完造は同寺檀徒の家に生まれ、先代住職と深い関係があったということで、片岡良仁住職から同寺と完造の関係・縁について説明を受けた。完造が亡くなる4か月前の1959（昭和34）年5月に同寺でおこなわれた完造による講演テープの再生からはじまり、先代住職が完造逝去後につくった位牌などを見せていただいた。久保卓哉福山大学名誉教授も同席され、内山家の家系図など貴重な資料の紹介を受けた。



本堂に祀られている完造の位牌と写真



片岡住職の話聞く一行

その後、片岡住職の案内のもと、井原市内の内山完造ゆかりの地をめぐる。真宗寺、荒神社（荒神様）、当正寺は『花甲録』の「明治癸巳二十六年（1893）」に「西吉井への里道の山の下に真宗寺と荒神様と当正寺と云うのが並んで居ってその荒神様の石灯籠に毎晩各家が交替で当番になってお灯明を上げに行くようになって居った」（p.6）と記述されている。

当番のときには幼い完造が油壺とマッチを持って、怖がりながらも石灯籠に火をつけたという。「しかも石灯籠が少し高いので小さい私は抱きつくようにして油を差して火をつけたものだ」（同）とするが、現存する灯籠は164cmの筆者にとっては火を灯すところはかがんで見る高さであり、「少し高い」とは思えなかった。現在の灯籠が当時のものと同一であるかは定かではないが、幼少の完造にとっては高いものであったのだろうと思いを馳せた。



荒神社



石灯籠

続いて、内山完造の生家跡、内山家の先祖の墓、また完造両親の墓をまわった。生家跡は「内山完造先生生誕の地」という碑と案内看板が設けられている。芳井村に4戸あった内山姓のうち、完造の生家の屋号は「堂ノ上」であり、現在も生家跡の隣にはお堂が存在している。屋号を「本屋」とする一番古い家の「裏の畑の中に」あった墓場（p.1）は、現在は水田に囲まれたところに位置する。完造の両親の墓はそこにはなく、当正寺の方にある。

次に訪れた芳井歴史民俗資料館では、完造が奉公先から恩師に宛てた手紙などの所蔵資料を出していただき、資料の整理状況などの説明を受けた。さらに車を走らせ、井原市芳井生涯学習センターでは、2000年に製作された胸像（上海の魯迅記念館と同じもの）や

郭沫若直筆の内山完造追悼詩を見学し、隣接する井原市立芳井図書館では、中性紙の保存箱に丁寧に保管されている内山完造の著作など彼にまつわる図書群を見せていただいた。最後に、井原駅方面に向かう途中の桜橋公園にある「内山完造先生頌徳碑」（1979年建立）を見学し、井原市での完造ゆかりの地めぐりを終えた。その後、研究会一行は、翌週豪雨被害を受けた井原鉄道井原線を乗り継ぎ、次の目的地となる岡山まで移動した。



生家跡付近のお堂

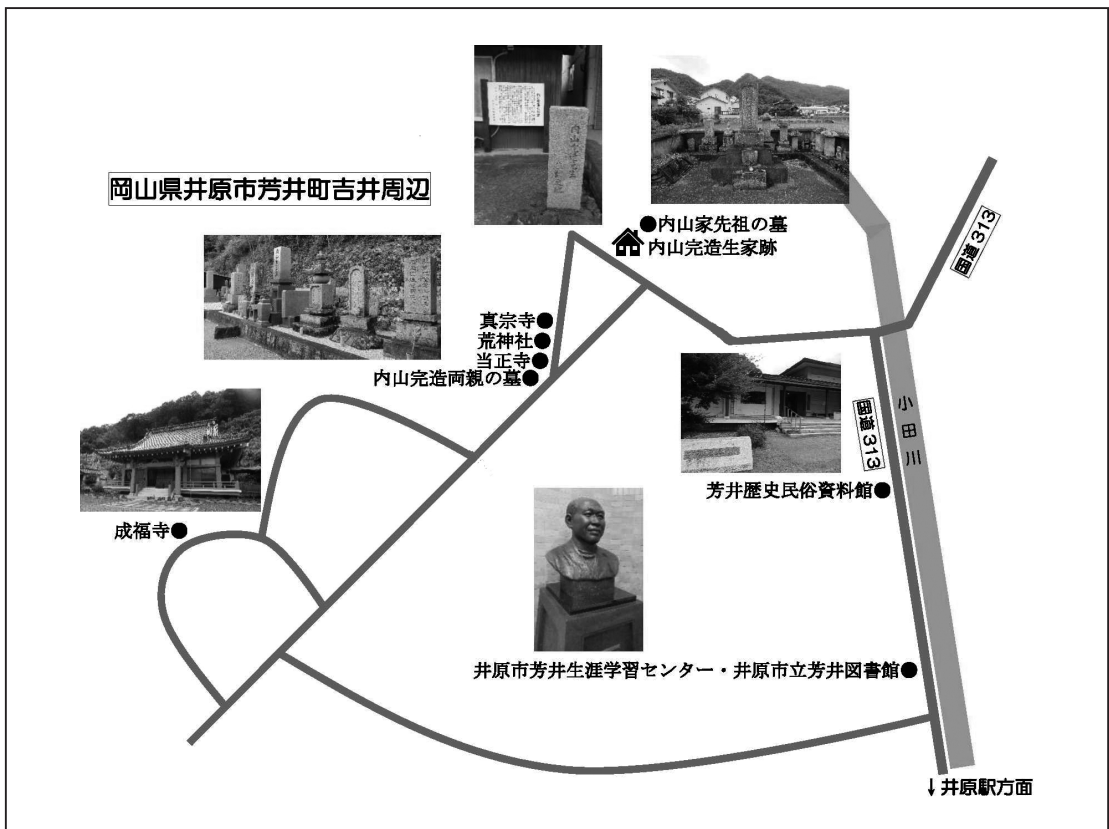


頌徳碑



頌徳碑の横にある完造の胸像

井原市内をめぐるなか、没後20年、40年を記念して頌徳碑や胸像がつけられるなど、内山完造が地元出身の重要な人物として位置づけられているのを確認できた。今回訪問した主な場所は以下の地図を参照（本稿における写真・地図はすべて筆者撮影・作成である）。



岡山市日中友好協会と大阪

6月28日は、岡山市日中友好協会の訪問から始まった。松井三平専務理事が応対くださり、会報『岡山と中国』に掲載された内山完造関連記事や同協会30年史などの資料の提供を受けた。また、同協会初代事務局長である故・中西寛治氏の未整理資料についても説明を受けた（同資料には内山完造関連のものも含まれるため、8月4・5日に研究会から内山、大里、筆者が再度同協会を訪問し、資料の調査・整理をおこなった。福山市日中友好協会会長の佐藤氏も同席した。完造に関する資料は、戦後の日中友好運動にかかわるものが大部分であり、貴重なものも含まれていた）。内山完造は戦前の上海での活動や魯迅との関係にフォーカスを当てられることが多いが、戦後に初代理事長をつとめるなど日中友好協会とも深いかわりがあり、内山完造研究は多方面に展開する可能性があることを実感した。

昼過ぎに岡山から大阪に新幹線で移動し、午後2時に大阪駅の目の前にある参天製薬株式会社を訪問した。広報担当者の応対を受け、資料として、参天製薬ひとみ会『大学目薬千一夜物語』（1999年、非売品）の閲覧のみが許された。内山完造が派遣員であった頃に上海より書き送った通信などの資料を期待したが、同社から積極的な協力は得られなかった。

参天製薬を後にし、完造の最初の奉公先である「安土町三丁目の大塚為三郎商店」（p. 11）跡地に向かった。場所の特定は、国際日本文化研究センターの所蔵地図データベース（<http://ndb1.nichibun.ac.jp/tois/chizu/menu-1.html>）で大阪の古い地図（19世紀末から20世紀初頭のもの）を複数確認し、それに現在の地図をトレースするかたちでおこなった。完造が大阪に向かった1897年当時の「安土町三丁目」は、現在は安土町2丁目と3丁目にまたがる^{だいた}ところにあたる。「大塚為三郎商店」は洋反物商であり、俗に「大為々々」（p. 13）と呼ばれたという。「大阪市街精密地図 舟場之部」（1906年）は詳細な地図で、確かに安土町3丁目周辺には洋反物商、メリヤス商、木綿商、呉服屋などの店名が記されているが、そこに「大塚商店」の名前を見つけることはできず、今回の調査では正確な場所を特定できなかった（完造は1901年に大塚商店を去っている）。

安土町2丁目から3丁目にかけて歩いたあと、丁稚となった完造の「受持ちは御霊筋と淀屋橋であった」（p. 12）ため、当時と位置の変わらない本願寺津村別院から御霊神社にかけての御霊筋と、そこから淀屋橋にかけての道を見てまわった。

なお、『花甲録』には、完造は大阪で「食の道に深入りするようになり、その「病の進行はスキ焼屋からおすし屋へ、遂に天ぷら、うなぎ等の小料理屋にまで発展した」（p. 15）との記述があったので、周辺に当時から存在するお店を探したところ、「大阪市街精密地図 舟場之部」にも載っており、場所も変わっていない1841（天保12）年創業の吉野簀（すし）を見つけた。残念ながらお店は営業していなかったが、安土町から至近距離にある寿司屋であるため、完造もここで寿司を楽しんだかもしれない。



現在の大塚為三郎商店跡付近



吉野簀



御霊神社

京都のゆかりの地

最終日の6月29日は早朝大阪から京都に移動し、午前10時よりホテルグランヴィア京都のロビーラウンジにて、内山完造の最初の妻・みきの甥であり、宇治市日中友好協会会長である井上浩氏にお会いした。貴重な写真や資料をご持参くださり、伝え聞いた完造・みきのエピソードや、井上氏と中国とのかかわりなど多くのお話を伺うことができた。午後の京都市内の完造ゆかりの地の散策にも井上氏はお付き合いくださった。

1901年に大塚商店を解雇された内山完造は、紆余曲折を経て、錦市場付近の①「京都市堺町蛸薬師下」の「赤野三次商店」(p. 18)に入店した。完造はその後1913年に上海へ渡るまでの多くの時間を赤野の家族とともにする。

赤野商店は業種をたびたび変えるばかりか、一か所に落ち着くことがなかなか無く、ときに夜逃げも含めて移動を繰り返した。『花甲録』からその移動を拾ってみると、1903年頃に②「柳馬場錦小路上ル処」(p. 22), ③「堺町姉小路上ル西側の露路」(p. 23), 1905年は「丸太町川端東入ル処」(p. 27), 「大阪北区曾根崎上三丁目」(p. 28), 1908年には大阪を夜逃げするかたちでふたたび京都の「御前通大將軍西入ル紙屋川の橋詰め藪陰」(p. 31), 1909年は「中立売智恵光院西入ル北側」(p. 32), 「上長者町の智恵光院西入ル」(p. 33), 1912年に「上長者町堀川東入ルところ」(p. 46), 「宮垣町」(同), 「東洞院姉小路上ル」(p. 47)という具合であった。しかし、完造は同年ついに「赤野家からお暇を頂戴し」, 「三条通高倉の角」の「東枝新聞部」に配達員として転職した(p. 49)。

同じ1912年、完造はのちに深い縁となる「京都富小路二条下ル京都教会の門をくぐった」(p. 45)。翌1913年には、同教会の牧野虎次牧師の紹介で参天堂の田口謙吉社長と面会し、同社に上海出張員として入社することとなり、内山完造は中国大陸に踏み出すのである。

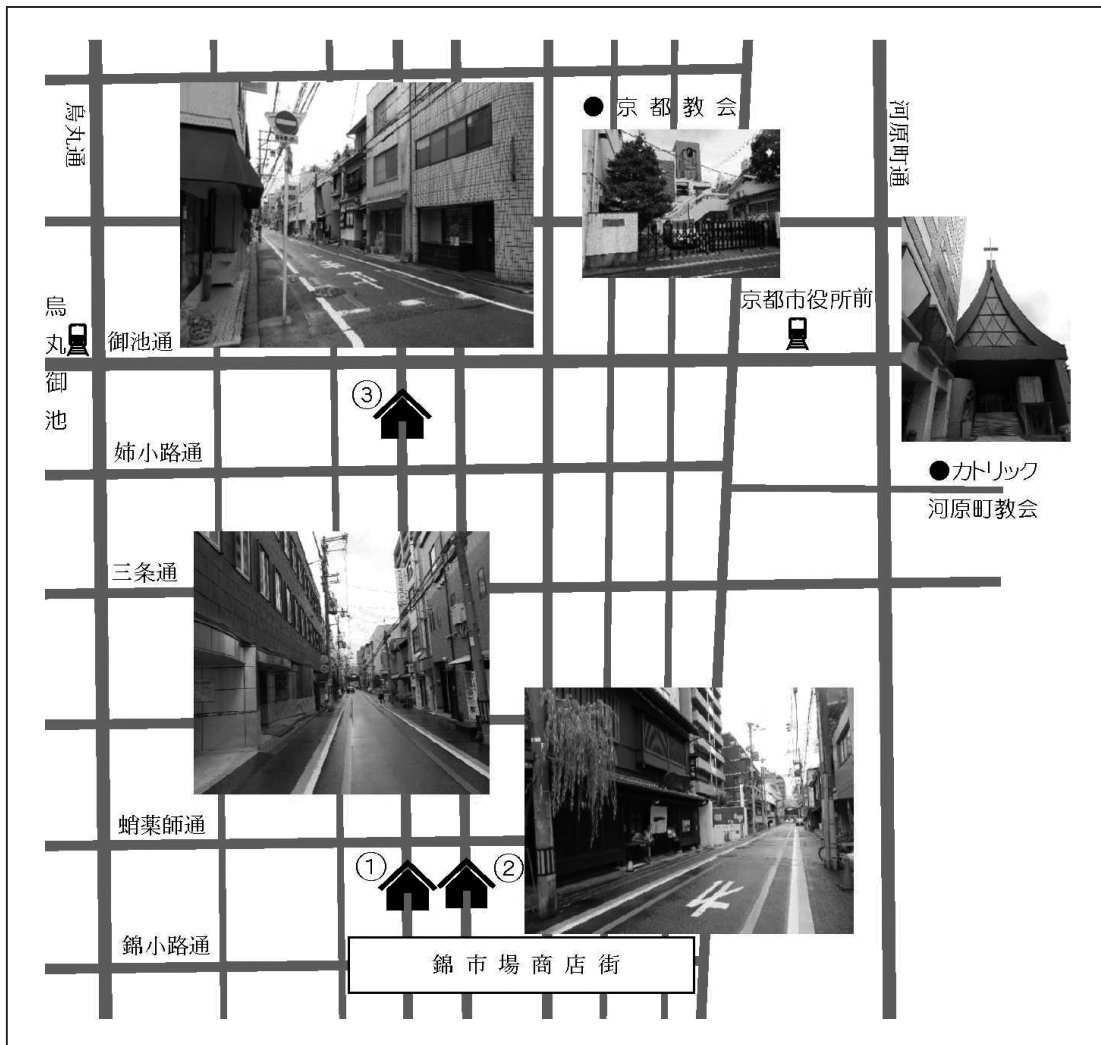
今回は時間の制約があり、初期の赤野三次商店が所在した①～③, また赤野の娘が訳あって1911年に預けられた「河原町三条上ルところに在る天主堂」(p. 40, 現・カトリック河原町教会)と京都教会しかまわることができなかったが、赤野商店が錦市場から徐々に離れていく(商売がうまくいかなくなっていく)様子を感じ取れた。また、現在の天主堂聖堂は1967年に建設されたもので当時のものとは異なるが(旧聖堂は愛知県犬山市の明治村に「聖ザビエル天主堂」として移築されている), 1909年に現在の地に移転した京都教会は在りし日の塀の一部をいまなお残している。牧野牧師の縁でのちに妻となるみきとも出会い、内山完造とキリスト教のかかわりはこの地より始まったのだと歴史の風を感じた。京都教会を最後に、一行は帰路についた。京都でまわったのは以下の地図のとおりである。



井上浩氏を囲んで



京都教会の塀



今回の出張を通じて、完造が岡山から大阪、京都へと移動するなか、商売のノウハウを身に着け、キリスト教と出会い、上海に向かうまでの足跡を追体験できた。また、岡山では戦後に日中友好に尽力した事蹟に触れ、内山完造がいろいろな視角から研究対象となりうることを再認識した。完造の親類縁者がさまざまなかたちで中国とかかわりを持たれていることも印象的であった。この出張で得られた知見をふまえ、今後さらに調査・研究を進めることとした。